

## 第 2 章 建造物の概要

## 第1節 はじめに

ここでは、本プロジェクトで行った実測調査・ヒアリング、また既往研究を用いつつ、本庄煉瓦倉庫を概観する。本建造物はその成立から、現在に至るまでの用途の変遷に、その立地条件が大きく影響している。そのため、まず導入として、本倉庫の立地に関し、説明を加える。



図 2-1. 本庄町の繭市場 (大正元年)

出典: 本庄市史通史編 III .1995.

## 第2節 立地

本庄煉瓦倉庫は、埼玉県本庄市内の旧中心地に位置する（字上町、現在の銀座 1-5-16）。敷地は本庄市を東西につらぬく、中山道南側に面する。同立地は、以下の引用で示すように本庄煉瓦倉庫成立の基本的条件であった。

（埼玉県本庄市は、）明治後期には桑畑の著しい拡大がみられ養蚕が盛んになり、製糸業もいっそう発展した。その後、昭和初期に最盛期となり、畑の6～7割は桑畑という状況になった。昭栄製糸・橘館製糸の工場が立地し、周辺では業者や農家による賃機生産が行われた。

山口恵一郎・日本図誌大系 関東 I .朝倉書店 .1972.

繭の取引が主に行われたのが、中山道であった。官営富岡製糸場が設立されると、

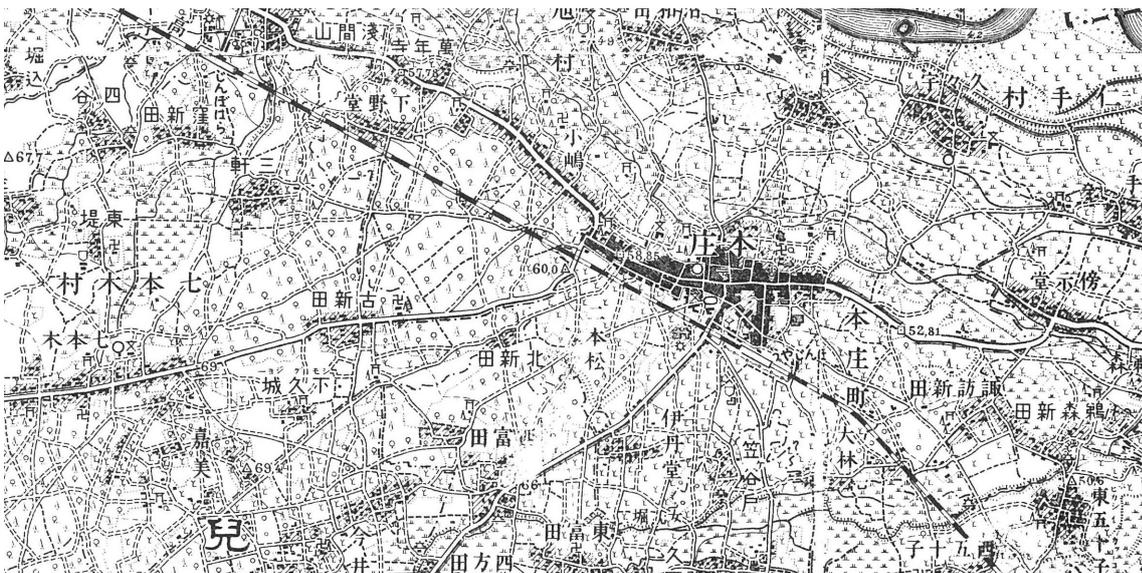


図 2-2. 本庄市 (明治40年測図)

出典/山口恵一郎・日本図誌体系 関東 I .朝倉書店 .1972.



初代場長であった尾高惇忠（1830-1901）により、本庄市は繭取引の拠点に設定された。これにさらなる拍車をかけたのが、明治20年代以降の民間器械製糸業者の発生である。それまでの製糸業は、農家の副業として行われ、その方法も座繰であり、品質・生産力ともに限界があった。そのため、器械生産の開始は、生糸の生産量を増大させ、大量の繭需要を生み出した。明治30年代の繭取引高は、明治10年代と比べ、30倍ほどに増え、本庄市における桑畑の面積が増大した。

以上の経緯は、本庄町に短期の巨額な資金需要を呼び起こした。これらを背景として、繭を担保とした資金の貸付を目的として、明治27(1894)年、本庄商業銀行が設立された。そして明治29(1896)年、本庄商業銀行倉庫が建設された。

次項においては、本庄商業銀行所有であった本庄煉瓦倉庫の設立から、2011年の本庄市買い上げに至るまでの、同建造物の遍歴を記す。

### 第3節 沿革

明治27(1894)年12月、株式会社本庄商業銀行は、本庄町最初の銀行として設立された。資本金は5万円。

図2-3. が、調査で取得した建設当初の本庄煉瓦倉庫についての写真の一枚である\*。その写真において「埼玉貯蓄銀行」の看板が掲げられているのが確認できる。この「埼玉貯蓄銀行」とは、同建造物を利用した銀行のことである。明治28(1895)年11月、株式会社埼玉貯蓄銀行が、本庄商業銀行の貯蓄部に位置する組織として成立したのであった。

明治29(1896)年、銀行の担保倉庫として、本庄煉瓦倉庫を2月着工、同年8月に竣工する。

大正8(1919)年、株式会社武州銀行が設立されたのに伴い、本庄商業銀行は大正10(1921)年12月に合併。武州銀行本庄支店となった。

\* 本資料は、「明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』」第2巻に収められていたものである。この資料に関しては、第4章第1節で詳述してある。

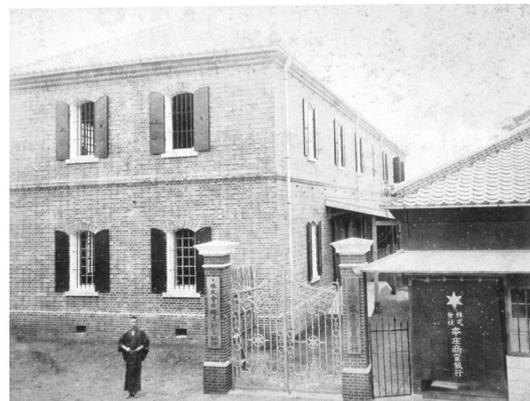


図2-3. 本庄商業銀行を背景にした関係者記念写真（大正期）  
出典：清水店・明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』、1900.

昭和 18 (1943) 年、武州銀行は他四行の合併により、埼玉銀行となる。この合併により、近隣に同じ銀行が隣接することとなったため、本庄煉瓦倉庫は富士瓦斯紡績株式会社（後に、富士紡績に改称）の所有となった。

昭和 33(1958) 年に一旦、本庄市の所有となるが、翌年昭和 34(1959) 年に栗豊株式会社の所有となった。その際の用途は不明。

昭和 52(1977) 年 11 月、ローヤル洋菓子店所有となった。用途は店舗兼製菓工場として、利用が開始された。

平成 23(2011) 年、洋菓子店の閉店に伴い、本庄市が買い取り現在に至る。保存もしくは地域への公開に向けた再生活用のために調査分析が続けられている。

| 年号 | 年月               | 本庄煉瓦倉庫の沿革                       | 年月               | 本庄市に関する出来事   |
|----|------------------|---------------------------------|------------------|--|
| 明治 | 明治 27 (1894) .12 | 株式会社本庄商業銀行設立                    | 明治 7 (1874)      | 上州富岡製糸場より本庄宿に諸井泉右衛門らに生繭の買入を依頼される。以降本庄市で繭市場が本格的に開始。 |
|    | 明治 28 (1895) .11 | 株式会社埼玉貯蓄銀行設立                    | 明治 16 (1883) .10 | 高崎線本庄駅が開設される。                                      |
|    | 明治 29 (1896) .8  | 本庄煉瓦倉庫竣工                        | 明治 22 (1889) .4  | 町村制の施行により、本庄宿から児玉郡本庄町となる。                          |
|    |                  |                                 |                  |  |
| 大正 | 大正 9 (1920) .12  | 株式会社武州銀行に本庄商業銀行が合併。武州銀行本庄支店となる。 |                  |  |
| 昭和 | 昭和 18 (1943)     | 武州銀行と他四銀行の合併に伴い、本庄支店が廃止される。     | 昭和 29 (1954) .7  | 本庄町・藤田村・仁手村・旭村・北泉村の一町四か村が合併し、本庄市となる。               |
|    | 昭和 19 (1944)     | 同倉庫が富士瓦斯紡績会社の所有となる。             | 昭和 32 (1957) .7  | 児玉郡共和村の一部を本庄市に編入する。                                |
|    | 昭和 33 (1958)     | 同倉庫が本庄市の所有となる。                  |                  |  |
|    | 昭和 34 (1959)     | 同倉庫が栗豊株式会社の所有となる。               |                  |  |
|    | 昭和 52 (1977) .11 | 同倉庫がローヤル洋菓子店の所有となる。             |                  |  |
| 平成 | 平成 23 (2011)     | 洋菓子店の閉店に伴い、本庄市が同倉庫を買い取る。        | 平成 18 (2006) .1  | 児玉郡児玉町と合併し、新たに本庄市となる。                              |

図 2-4. 本庄煉瓦倉庫と本庄市の歴史の年表

## 第4節 構造形式

本敷地内における建物は、煉瓦倉庫と土蔵、またそれらを連結する附属屋の3棟から構成される。各建物の概要は次の通り。

|      |                |
|------|----------------|
| 煉瓦倉庫 | 煉瓦造 地上2階建      |
|      | 建築面積 330.721㎡  |
| 旧土蔵  | 土蔵造 地上1階建      |
|      | 建築面積 97.560㎡   |
|      | 住居に改造後現在に至る    |
| 附属屋  | 鉄骨柱木造小屋組 地上1階建 |
|      | 建築面積 62.420㎡   |

以下では、特に煉瓦倉庫について記載をおこなう。

### 1. 概要

- ・ 煉瓦造（床組・小屋組：木造）、2階建て、  
 棧瓦葺き
- ・ 桁行 36.442m × 梁間 9.110m
- ・ 建築面積 330.721㎡
- ・ 延べ床面積（1階 288.239㎡ 2階 300.127㎡）

### 2. 基礎

- ・ 地業は、すべて煉瓦により構成される。根石は、腰壁上端から煉瓦14段下がった位置より、煉瓦11段でつくられる。<sup>\*</sup>
- ・ 根石上端は、腰壁より30mm迫り出す。さらに、その上端から煉瓦5段下がる位置から、6段の煉瓦（2段ずつ3段階）で末広りの形状を構成する。この部分の煉瓦の迫り出しは、上部より、57mm、50mm、68mmである。また、煉瓦積みの下には、割栗石として砕いた

<sup>\*</sup> 内外に対して対象形となっているものと推測されるが、詳細は調査不可能であり不明。よって、ここでは、外側からの観察のみを記載した。

煉瓦のみを用いていることが確認された。

- ・ 倉庫東側には、基礎を覆う石組みとセメントを用いた構造体が見られる。
- ・ 石組み：東側私道際と煉瓦壁に沿って2段の石組みがある。路上面からの高さはほぼ290mm。また、各々の石の寸法は巾170mm～330mm、高さはほぼ210mmで一定。また、奥行は110mm～210mmであった。また石材表面には斜方向に歯形の加工あり。

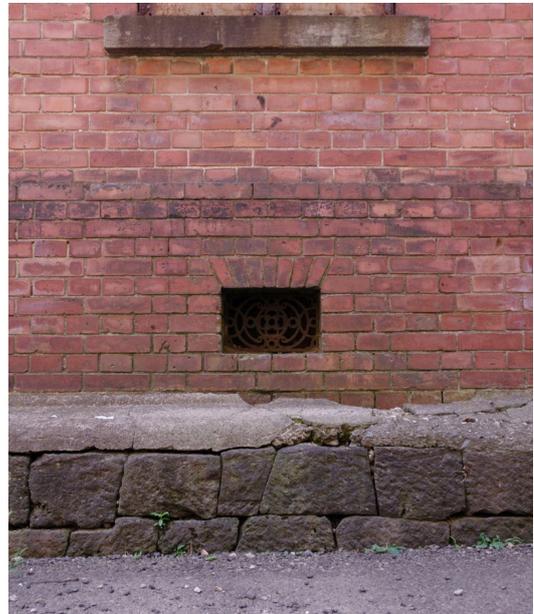


図2-5. 基礎部分を覆う石組みとセメントの構造体

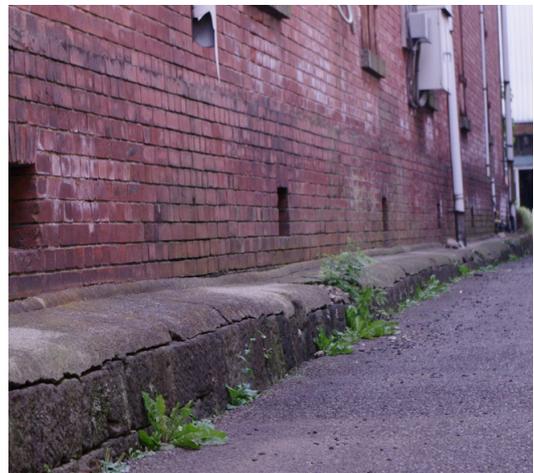


図2-6. 倉庫東側接道の地業の様子

- セメント：石組みの上端部から煉瓦壁にかけて概ね 70mm 程度の厚みで盛られている。煉瓦に迫り上げるように接着されており、その上端は腰壁上端より 11 段下がった煉瓦下端の線に沿わせ、施工されている。また雨樋受け部分のみセメントを用いず、排水溝を彫り込んだ石材を用いる。

### 3. 腰壁

- 基本の煉瓦壁以外に、1 階腰部に腰壁が取り付く。倉庫東側を除き、外表面に焼過煉瓦<sup>\*\*</sup>が用いられる。焼過煉瓦<sup>\*\*</sup>の寸法は、概ね L210mm × W105mm × H55mm。
- 積み方は、オランダ積（七五追出しイギリス積<sup>\*\*\*</sup>）。ただし、倉庫南東隅部の納まりにのみ、羊羹煉瓦<sup>\*\*\*\*</sup>を用いているため、イギリス積とオランダ積の併用となっている。
- 同部分は基礎から 13 段積み。壁厚は煉瓦 2 枚積に羊羹煉瓦を加えている（実測値 540mm）。通常の外壁面より、60mm 迫り出している。腰壁上端には、厚さ 10mm 程の、勾配のついたモルタルがのせられている。
- 倉庫西側の、建設当初の開口部付近にお

\*\* 通常の焼成温度よりも高い温度で焼成した煉瓦。色は褐色を帯びており、耐摩耗性がある。また、普通煉瓦との色合いの違いを利用し、装飾的に利用されることもある。

\*\*\* オランダ積の基本的な煉瓦の積み方は、イギリス積とほぼ同様。イギリス積との差異は、出隅部において羊羹煉瓦（註を参照）を用いず七五煉瓦を用いるところである。そのため、これらは区分されずイギリス積の一部とされることが多い。日本では、一般的にはイギリス積の方が古くから用いられ、オランダ積が時代的には後の技術とされている。そのため、当時の建設技術を検証する上で貴重な事実として、あえてオランダ積であること明記した。

\*\*\*\* 煉瓦は、基本形のほかに、開口部や隅部などに用いる特殊な形状のものがある。羊羹煉瓦は、煉瓦を長手方向に、縦に割ったもの。

いて、基本の煉瓦壁と面を<sup>つら</sup>あわせ、迫り出されていない箇所が確認できる。それは、2 箇所の開口の両脇にそれぞれあり、計 4 箇所存在する。その範囲は、開口両脇において、腰壁上端より巾煉瓦 3 枚分（実測値 630mm）、高さ煉瓦 2 段分（実測値 132mm）である。ここにも焼過煉瓦が用いられている。

- 通気口：腰壁下部には、通気口が設けられてある。その水平位置は開口部と同位置で、各開口部の下には必ず設けられる。開口寸法は、巾が煉瓦 1 枚半（実測値 347mm）。高さが煉瓦 3・1/3 段分（実測値 235mm）。開口部まわりの煉瓦は、七五煉瓦を利用して、調整している。また、開口部上部には、迫持煉瓦を 7 つ用いている。
- 倉庫東側の通気口には、鋳鉄製換気金物が嵌めこまれているのが確認できる。腰壁面より、金物までの距離は 160mm である。また、金物奥には、金網が組み込まれている。通気口は、現状、内部において鉄板で塞がれている。また、東側以外の部分に関しては、石材等で塞がれている。

### 4. 外壁

- 煉瓦の寸法は、概ね L227mm × W108mm × H60mm である。煉瓦は日本煉瓦製。
- 積み方はオランダ積（七五追出しイギリス積）。ただし、長手煉瓦の段に、妻側 3 個、平側 9 個の小口煉瓦を混ぜている<sup>\*\*\*\*\*</sup>。
- 壁厚は、1 階妻側は、煉瓦 2 枚積（実測

\*\*\*\*\* これは開口部まわりの煉瓦積みの計画に深く関係していると考えられる。この考察については、3 章 5 節において詳述をおこなった。

値 466mm)。平側は煉瓦 2 枚積 (実測値 475mm)。2階妻側は煉瓦 1 枚半積 (実測値 365mm)。平側は煉瓦 1 枚半積 (実測値 365mm)。また、高さは 106 段の煉瓦を重ねる。

- 倉庫四周にわたり胴蛇腹と軒蛇腹、また西側にのみボーダーが設けられている。以下にその詳細を記す。なお、高さの記述は腰壁上端を仮設計 GL とし記述をおこなった。
- 胴蛇腹：腰壁上端より、55 段目から 57 段目 (仮設計 GL + 3,736mm-3,869mm) にかけて 3 段により構成される。上下段を小口積、中段が長手積のイギリス積み。55 段目は外壁面より、30mm 迫り出す。また、56,57 段目は面を同一にして、外壁面より 55mm 迫り出す。
- 軒蛇腹：腰壁上部より、102 段目から 107 段目 (仮設計 GL + 6,926mm~7,273mm) にかけて、下 2

段中 3 段上 1 段の 3 段階で構成される。イギリス積だが、最上部は二段とも小口積み。外壁面からのせり出しは、下段 50mm 中段 110mm 上段 130mm。

- 倉庫西側にのみ、四周に存在する蛇腹とは別の、一段で構成されるボーダーと切石が設けられている。
- ボーダー：腰壁上端より 49 段目 (仮設計 GL+3,334mm) の煉瓦が、100mm 迫り出し設けられる。
- 切石：煉瓦 66,67 段目にあたる位置に入れている。これは、窓下枠のまぐさ石を構成する切石と同じ石材により作られている。二階開口部のまぐさ石を連結しているような意匠を持つ。
- これらは、水平位置・高さにおいて、建設当初ついていた庇位置と一致する。そのため、庇を取り付けるためのものと考えられるが、その詳細は不明。



図 2-7. 本庄煉瓦倉庫における軒蛇腹・胴蛇腹・ボーダー・まぐさ石



図 2-8. まぐさ石 詳細

## 5. 開口部

### 5-1. 出入口

- 倉庫には現状4箇所の出入口がある。ここでは、以下図のように「北側・店舗入口1」「西側・店舗入口2」「西側・2階非常口」「南側・作業場口」と呼称する。これらの呼称は、洋菓子店を営んでいた前所有者からの聞き取りに現れた用法である。ただし、建設当初の出入口であった部分が、現在荷物用エレベータにより内側より塞がれてしまっている。これを、「西側・元出入口」とする。建設当初の出入口は、西側2箇所のみであり、西側・店舗入口2は、当初の開口部を改修し利用している。
- 北側・店舗入口1：開口大きさ L1,872mm × H2,096mm。建設当初は窓が設けられていた部分を改修した(9ページの竣工当時の写真を参照のこと)。また、開口部の周りには、化粧材として厚さ60mm、巾290mmの石材のタイルが張られている。中山道側より、スロープで上る。自動ドア付設。
- 西側・店舗入口2：開口大きさ L1,685mm × H2,935mm、上部をアーチとする。店舗入口1と同様に、化粧材

の石材タイルが厚さ60mm、巾290mmで設けられている。自動ドア付設。この出入口は、建設当初の出入口が改修されたものと推察される。

- 西側・2階非常口：開口大きさ L1,355mm × H1,942mm。倉庫西外側の非常階段をあがった場所に設けられている。これはローヤル洋菓子店へ用途変更する際に消防署の指導により設けられた。煉瓦壁体を穿ち設けられている。外枠は、厚さ40mmのセメント。ドアには外側への開き戸と、嵌殺しの窓が取り付けられている。
- 南側・作業場口：開口大きさ L1,734mm × H1,974mm。建設当初窓が設けられていた位置と推察される。新たに新設された開口部による断面は板材により塞がれている。
- 西側・元出入口：開口大きさ L1,800mm × H3,125mm、上部をアーチとする。内側には、かつての建具の跡を残す。店舗入口2と開口形状は同じ。アーチ部分は嵌殺し窓、その下に開き戸をもつ。現在は、出入口を背にしたエレベータが内部に設置されているため、板により塞がれ利用されていない。

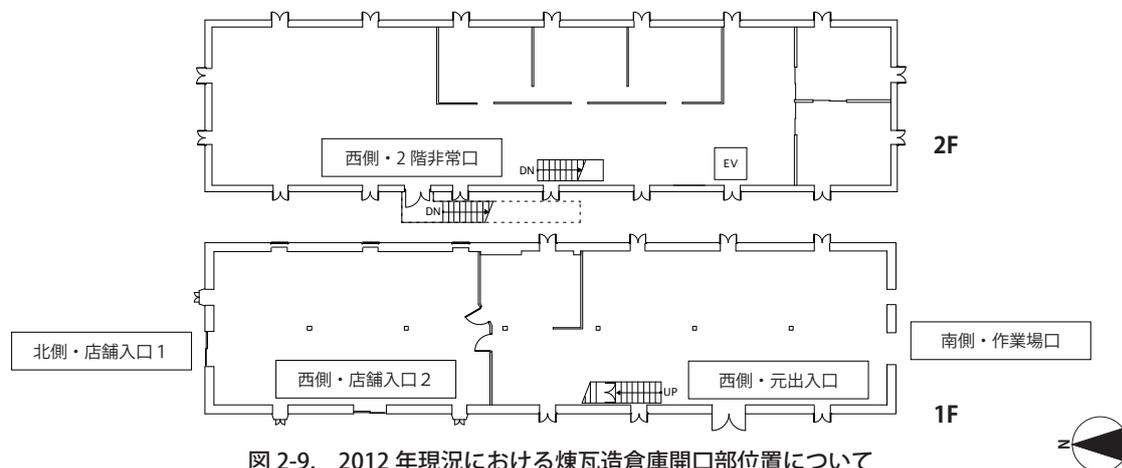


図 2-9. 2012 年現況における煉瓦造倉庫開口部位置について

### 5-2. 窓

- 倉庫妻側・平側、1・2階に閉鎖付両開防火鉄扉をつけた窓を設ける。現在は、出入口の増設で、両妻側1階の窓をそれぞれ一つずつ失っている。建設当初の姿は、両妻側において、1・2階に2つずつ。また平側において、1・2階ともに7つずつ。ただし、倉庫西側1階は、2箇所の窓位置を出入口としている。すべての窓が、同様の形式をもつ。
- 開口：大きさ L830mm × H1,645mm。開口下部は、外側にむかって傾斜がつけられており、75mm 下がる。内側の面は漆喰塗りで仕上げ。開口部分にΦ20mm の5本の鉄柵が入る。さらに、横方向にはそれらを束ねる L38mm × H10mm の鉄材2本が取り付けられる。また、開口部内側の縁には、巾50mm のタイルが張られている。
- 開口外側：鉄扉が取り付けられる。鉄扉は、巾30mm の枠に鉄板をリベット打。また、内側には閉鎖と、取り外しの出来るチェーンを持つ。改修されていない全ての窓の鉄扉が、一部腐朽しつつある部分もあり、早急な保全対策が必要である。
- 開口内側：漆喰塗りの板戸と網戸が設けられる。それらは、開口部上下に取り付けられた板材に、嵌められている。その板材の長さ開口部内法の3倍、高さ140mm。そのため、状況により開口部分に板戸と網戸をあてることが出来る仕組みとなっている。板戸は、L926mm



図 2-10. 開口内側 建具の様子（当初の姿をのこしているもの）

× H1,711mm で、外側を漆喰塗り、内側を板無塗装としている。縦板張りであり、1枚の板巾 888mm。網戸は、L885mm × H1,720mm で、外側から金網を張られている。

## 6. 屋根

- ・ 棧瓦葺き。寄棟屋根。軒先には、雨樋が建設当初より設けられていたが、樋自体は後に付け替えられている。ただし、樋を受ける金具は建設当初のものである。屋根瓦は、ローヤル洋菓子店が入居時に葺き替えたとのこと（元ローヤル洋菓子店店主江原栄一氏の証言による 巻末資料参照のこと）。

## 7. 庇

- ・ 倉庫西側外壁に庇跡あり。また、古写真よりその存在を確認した。その規模は不明であるが、竣工写真から判断して木製の庇である。

## 8. 外部・その他

- ・ 倉庫西側に巾 1,000mm の鉄骨製非常階段あり。西側・二階非常口につながる。これは、消防法により非常口を 2 階に設ける必要性が生じ、ローヤル洋菓子店店主が増設したものであるとのこと。増設年不明。

## 9. 一階・壁

- ・ 店舗部分：煉瓦壁漆喰塗り仕上げ。ただし、店舗部分は改造甚だしいため、建設当初の姿ではない。ローヤル洋菓子店が入居時に、高さ 1,150mm の腰板壁を付設した。（元ローヤル洋菓子店店主江原栄一氏の証言による）
- ・ 作業場部分：煉瓦壁白色ペンキ塗り仕上げ。ただし、ペンキ下地は不明。腰壁として、鉄板が回されており通気口の孔を塞いでいる。鉄板仕上げも洋菓子製造に

伴う改造である。

## 10.1 階・床

- ・ 店舗部分：現状は全体にフローリング張り。一階柱礎石露出。床下に、コンクリートを打ち束を立て床板を張る。創建当初の床を外して、より下方に現状床面を設置している。
- ・ 作業場部分：全体にセメントモルタル仕上げ。床面高さは、店舗部分に連続している。（元ローヤル洋菓子店店主江原栄一氏の証言による）

## 11.1 階・軸組

- ・ 柱：215mm × 215mm。方杖は、145mm × 145mm。いずれも角材が用いられている。また、店舗部分の柱には、化粧材が巻いてあり、化粧材の無い部分は、黒塗り。

## 12.1 階天井

- ・ 2 階床板、床組表し、無塗装。
- ・ 大梁は、太さ L230mm × H380mm で継手の位置は柱芯。
- ・ 小梁は、太さ L170mm × H400mm。
- ・ 根太は、太さ L52mm × H140mm。
- ・ 小梁の配置には柱との関係性が見られない。また大梁と小梁は、煉瓦壁とボルトで連結されている。

## 13.2 階床

- ・ 床板は、厚さ 24mm、巾 215mm。無塗装。また、荷揚げ口と階段箇所、荷揚げ用エレベータの箇所において、穴が開けられている。南北 2 つ荷揚げ口の跡があり、その大きさは、両方共 1892mm × 1921mm。また、階段部分は、3650mm × 1297mm。

## 14. 階段

- ・ 鉄骨製の階段が取り付けられている。これは付け替えられたものであり（改修年

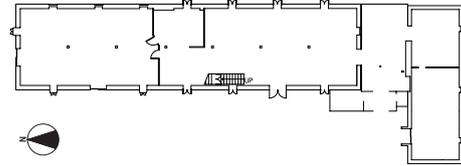
不明)、当初の階段跡も見られる。現在は南側に向かい上がる方向で取り付けられているが、もともとは逆向きであった。2階部分に設けられている木製手摺の一部を取り壊し、現在の上がり口としている。

### 15.2 階天井

- 洋小屋組(キングポストトラス)で、垂木及び野地板表し。無塗装。また、南北両部においては、寄棟架構表し。
- 小屋組(トラス): 陸梁 150mm × 240mm。合掌 150mm × 240mm。真束 147mm × 150mm。方杖 125mm × 125mm。吊り束 145mm × 57mmの材で、合掌と陸梁を挟む。棟木 120mm × 148mm。敷桁 109mm × 140mm。端母屋 94mm × 120mm。母屋 115mm × 120mm。雲筋交い 150mm × 50mm。また各トラスは、合わせ梁によって連結されている。その大きさはH 175mm × L 80mm。金物には、概ねΦ 13mmのボルトが用いられている。

## 第5節 建造物の現状

本庄煉瓦倉庫の現状の破損箇所は以下の通り。



### 1. 外部

**北壁面：**出入口新設により、煉瓦壁欠失。

**南壁面：**出入口新設により、煉瓦壁欠失。



図 2-11. 「北側・店舗入口1」開口上部



図 2-13. 「南側・作業口」

**東壁面：**基礎を覆うセメントに所々崩壊あり。特に倉庫南東部隅部において、著しく欠失。

**西壁面：**地盤面より 2,000mm 付近に煉瓦腐朽あり。目地モルタルも所々剥離あり。



図 2-12. 煉瓦倉庫南東隅部



図 2-14. 西壁面 煉瓦剥離箇所

## 2. 内部

### 1 階：

柱礎石に腐朽がみられる。これらは、概して湿気を帯びている様に見受けられる。一部は、既にコンクリ補強済み。北側の店舗への大規模な改修あり。



図 2-15. 建具

### 2 階：

南東面・北東面において、漆喰壁一部剥離。北東隅、床板に、一部破損あり、その補修跡も確認できる。



図 2-17. 漆喰壁剥離箇所

当初の床板は取り外され、店舗部分（北側）は、フローリングの床板に改修。工場部分（南側）の床は、セメントモルタル仕上。



図 2-16. 建具

2 箇所の荷揚げ用の穴があるが、現在塞がれている。



図 2-18. 塞がれた荷揚げ用の穴の一つ

**建具：**

鉄扉・鉄柵・漆喰板戸・網戸に、多様な改変がみられる。各開口部における、これらの建具の残存状況は、以下の図 2-19. の通り。



図 2-19. 板戸がガラス戸に変えられた建具

**3. 小屋組**

キングポストトラスの継手に、一部緩みあり。



図 2-20. トラスゆるみ

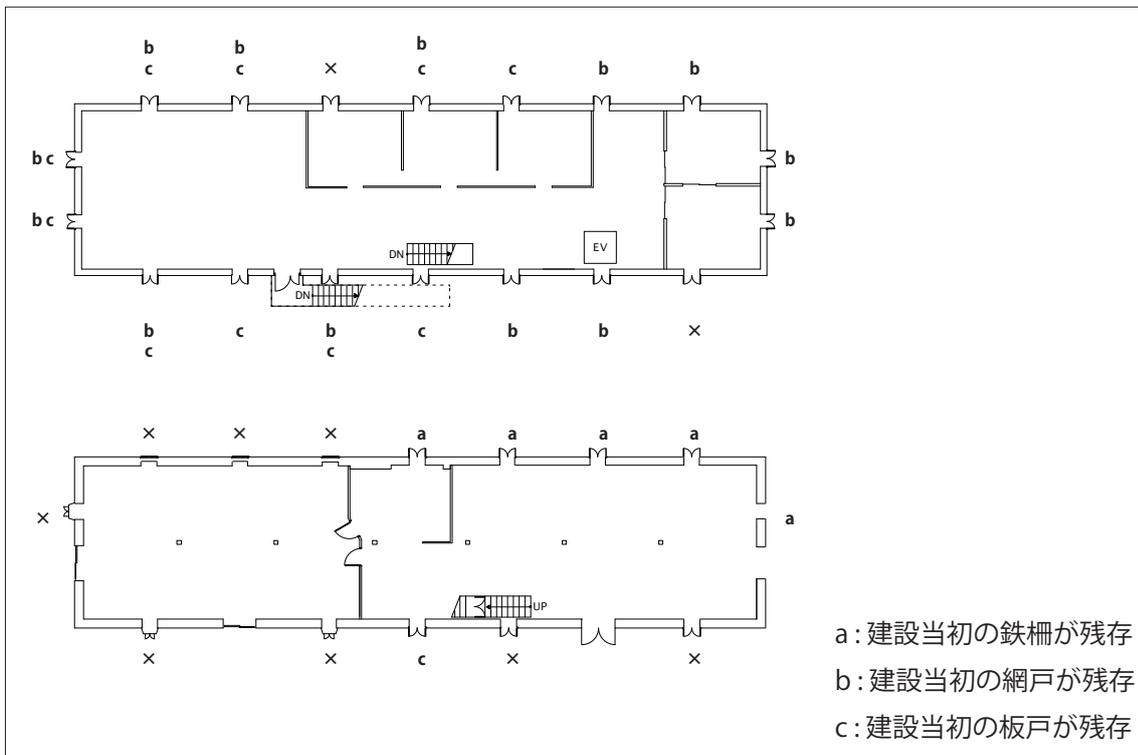


図 2-21. 建具の残存状況